



つるったぐり読書を楽しむ — 『岡田武松伝』 を読んで

蒲 生 俊 敬*

岡田武松 (1874~1956) をご存知ですか? かつて中央気象台 (現在の気象庁) の台長として活躍し、我が国の気象事業の礎を築いた第一人者です。その伝記『岡田武松伝』(須田瀧雄著) を、つい最近読了しました。

実のところ、この本は長い間 — 20年間か、それ以上かもしれません — ほとんど手に取ることなく、書棚の片隅に放置したままでした。いずれ読もうと思いつながら、その厚さ (600ページ) に尻込みするうち時間が過ぎていき、いつしか、この本を購入した理由さえ忘れてしまいました。

日本海海戦当日の有名な天気予報「天気晴朗ナルモ波高カルベシ」の起草者だから? 日本海洋学会の新人賞に岡田賞として名前を残しているから? それとももっと別のことだったのでしょうか。本書をどこかの古書店で購入したことは間違いなので、つい廉価に引かれた、という興ざめた話が正解かもしれません。

さて私は、大学を定年退職して4年が過ぎ、現役の頃に比べて本を読む時間が格段に増えました。それでやっと『岡田武松伝』を手にとることになるのですが、いくら暇になったとは言え、20年以上も死蔵していた本に、いきなり食指が動いたわけではありません。もっと関心を引く本が目白押しでしたから、ところが急転直下、この本が読みたくてたまらなくなったのです。その不思議な経緯を、まずお話ししましょう。

発端は、丸谷才一の『文章読本』を読んだこと

です。

丸谷才一は以前から心酔していた作家の一人で、『文章読本』は腰を据えてじっくり読みたい本でした。日本人に生まれた以上、日本語にもっと習熟し、満足のゆく文章を書きたい。そんな積年の望みを、多少なりとも適えてくれる本に思えたのです。期待違わず、本書は、古典や現代文から多くの実例を引いて文章作法の極意について語りかけてくる、まことに有意義な内容でした。しかし結局のところは「名文を見つけて、くりかえし熟読玩味せよ」に尽きるのですね。即効薬などないことを再認識した次第です。

『文章読本』の終わり近くで、「おや?」と思うページにぶつかりました。地震学者・坪井忠二のエッセイが全文引用されていたのです。それは「コケコッコ」¹と題する掌編で、鶏が毎朝ときを告げる声が数秒間隔で周期的に繰り返される理由をあれこれ考察しながら、最後にハッとさせる落ちの妙味を、丸谷才一は高く評価しています。自然科学者の書いたものまで読みこなしているのかと、一瞬びっくりしました。しかし『文章読本』にはちゃんと、「広い範囲にわたって多読し、多様な名文を発見してそれに親しむこと」とありますから、驚くようでは駄目なのでしょう。

「コケコッコ」の出典をみると、1961年発行の科学随筆集『星と地球と太陽と』²でした。ほかの作品も読みたくなり、アマゾンで検索すると古書がまだ出ています。そこで即購入しました。坪

*東京大学名誉教授

井忠二のほか、昭和時代の著名な地球科学者（宇田道隆・岡田武松・辻光之助・藤原咲平・和達清夫）の文章が多数収められている本です。自然から題材をとった話が多いので親しみやすく、また懐古的興味もあって、先へ先へと読んでいきました。

ここでまた、「おおっ！」と刮目する文章にぶつかります。それは和達清夫（元気象庁長官）の書いた「岡田武松博士を憶う」と題する追悼文でした。和達清夫は、中央気象台で岡田武松に鍛えられた俊英の一人。岡田武松への尊敬と親愛の念が、あふれんばかりの筆致で綴られています。なかでも、本をととても大切にしていたという話に、強く引きつけられました。思わずマーカーで線を引いた箇所を以下に転記します。

私の知る限りにおいて、岡田先生ほど書物を愛された方は少い。先生の御宅にはコンクリート二階建の立派な書庫がある。そこには気象学を中心として内外の地球物理学書をはじめ関係科学書がぎっしり蔵められている。これらの書物の中で暮されることは先生が一番楽しみとされたところで、先生のあの数多い著書はこの環境から生れている。

先生は、いわゆる趣味というものがなかったと言えるかも知れない。先生は御自分では格別に何かをなされなかったが、芸術を非常によく解された。しかし先生は全時間を、事業と学問とに、そして読書と執筆とに費され他には余裕を持たれなかった。したがって、もし趣味と言えれば読書と執筆であろう。それに海がお好きであった。船で旅行すると本も読めるし、よく寝られるし、汽車よりずっとよいとよく言っておられた。

ここに書かれていることは、私自身がいつも、こうありたいと憧れてやまない生き方に、まさに合致するのです。みるみる岡田武松に親近感がわ

きました。どんな人物か詳しく知りたい。そうだと『岡田武松伝』があったじゃないか、急げ！—と、あとは一直線です。

ある本を読んだことで別の本のことを知り、さらにその本がきっかけで次の本へと向かっていく。これを地球物理学者・竹内均は「つるつる読み読書法」と呼びました。イモの蔓をたぐるように、先へ先へと追いかけていくわけです。その終点に『岡田武松伝』が待っていました。

じっくり4~5日かけて読みました。著者の須田瀧雄は、中央気象台で岡田武松の薫陶を受け、内外の事情によく通じた気象人のひとりです（気象大学校教授・舞鶴海洋気象台長などを歴任）。「あとがき」を読むと、研究の寸暇を割き、膨大な資料をもとに自ら取材にも努めながら、3年かけて書き上げたとあります。ときにユーモアも交えた歯切れのよい文体はたいへん読みやすく、岡田武松の生涯を、公私にわたって忠実に辿ることのできる好著だと思いました。

大要を述べれば、大正から昭和、そして大東亜戦争の泥沼に向かう激動の時代に、中央気象台長（在任期間：1923~1940）の重責を担い、気象事業の確立と発展をめざして苦闘したりベラリスト岡田武松の人柄や勇姿が、懇切丁寧に描写されています。信念を持って礎を築くとはこういうことか、と何度も覚醒させられる思いで読みました。

当時文部省に所属していた中央気象台を、帝国陸軍の管轄下に入れようとした陸軍将校の威嚇を、岡田が毅然としてはねつけるくだりは圧巻です。もし中央気象台が陸軍気象台になっていたら、長年にわたる気象データや観測資材が、1945年の終戦とともに陸軍の機密資料と一緒に焼却されていたことでしょう。戦後の気象事業の復興にたいへんな支障が生じたに違いありません。

岡田武松が日本海洋学会（1941年発足）の初代会長だったことを、恥ずかしながら初めて知りました。それで岡田賞という名称につながるのですね。しかし岡田武松は、決して海洋学プロパーではありません。むしろ気象学を中核とする地球

物理学全般に枝を広げ、そのなかに地震学、海洋学、地理学、地磁気学なども包含する、当時としてはきわめて高度な学際性の持主でした。

そのように博識であればこそ、岡田武松には、海洋学を発展させることの重要性や緊急性が、誰より強く認識できたのだと思います。そして様々な先導的施策、例えば本邦初の海洋気象台（現在の神戸地方気象台）の設立、海上気象警報の無線放送開始（世界初）、本格的な海洋観測船として春風丸や凌風丸の建造……等が、次々と見えてきたのでしょう。さらに化学分野にもしっかり目配りし、若き三宅泰雄を北大から中央気象台へ招くという先見性には、ただ驚くしかないですね。

わずか125トンの春風丸には荷の重い外洋観測を推進するため、当時としては破格の大型船・凌風丸（1180トン）を実現しますが、ここでも岡田武松の手腕が光ります。何食わぬ顔で、海洋観測は表層だけです、これは気象観測専用の船ですから、と触れ回っておき、そのじつ、船内設備の中に深海観測用3000メートルウインチをしっかりと含めていた抜け目のなさ。その次の船の予算申請を見越して、表向きは凌風丸の性能を控えめに印象づけておこうとしたのです。

凌風丸は、戦前から戦後にかけて、我が国の海洋観測研究に計り知れない恩恵をもたらしました。開戦によって国際標準海水の入手が断たれたとき、三宅泰雄・石橋雅義（京都帝大教授）ら海洋学者一行が小笠原近海まで大量の海水を採りに行き、我が国独自の優れた標準海水を作り出すことができたのも、凌風丸あればこそその快挙でしょう。

岡田武松の独創的な発想力、つまり一見別々に見える事項や研究データを組みあわせて的確に先を読む能力は、岡田が生まれながらに、理科系と

文科系（芸術系）の両面に優れた素質を持っていたことに由来するような気がします。（『岡田武松伝』によれば、帝大に進学するさい、理科にするか文科にするか迷ったとか。）理科系には精密なデータ取得や論理的思考が欠かせませんが、文科系ではさらに美的センスとか感性とか、あやふやで捉えどころのないものが加わってきます。岡田武松は両者を程よく身につけていたことで、臨機応変、柔軟に頭の切替ができ、誰も思いつかないような先導的施策を数多く立案し実現できたのではないのでしょうか。

余談ながら、岡田武松には、優れた教育者としての側面もありました。それは単に教え方がうまかったというだけではないようです。三宅泰雄によれば、弟子たちが集まったとき、よく出た思い出話がこれでした。「（岡田）先生は仕事をしなければ、叱らずにみすてられた。仕事をすれば叱られた。叱られるうちは脈があるので、仕方なく、叱られ、叱られ、仕事をせざるをえなかった。」

（参考書籍）

須田瀧雄（1968）『岡田武松伝』、岩波書店、612ページ。

竹内均（1988）『私の知的鍛錬法』、徳間書店、218ページ。

丸谷オー（1980）『文章読本』、中公文庫、395ページ。

三宅泰雄（1969）『科学者の眼 人・自然・社会』、三省堂新書、193ページ。

吉田洋一・中谷宇吉郎・緒方富雄（編）（1961）『星と地球と太陽と』（科学随筆全集3）、學生社、347ページ。